

# 特別支援教育研究論文集

—令和7年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

通常の学級における多様な教育的ニーズのある児童生徒の個別の  
指導計画作成に関する実践的研究

— デジタルツール「シンプルチャート」を活用した取組を通して —

研究代表 長野県長野養護学校 教諭 伊藤千鶴  
長野大学社会福祉学部 准教授 青木雄一

令和8年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

## 要旨

通常の学級には多様な教育的ニーズのある児童生徒が在籍しており、個別の指導計画は、支援の目標と手立てを整理し、関係者間で共有・更新していくための基盤である。しかし学校現場では、協議に時間を要すること、目標や支援内容を具体化しにくいこと、実態把握が困難であること等を背景に、作成・活用において「検討」よりも「記入」が先行しやすい。

本研究は、個別の指導計画作成を「担任の書類作業」から「チームで考え、共有し、更新する実務」へ近づけることを目指し、教師支援プログラムとしてデジタルツール「シンプルチャート」を試行・改善した。あわせて、校内協議が限られた時間の中でも、児童生徒理解から支援の具体化を経て、次の一手の合意に至るまで前進するための条件と、そのプロセスを記述することを目的とした。フィールドは長野県内2校（研究校Ⅰ・研究校Ⅱ）であり、紙ベースでの試行（第1期：2024年度）と、運用上の課題を踏まえたデジタル再設計（第2期：2025年度）をアクションリサーチとして実施した。データは協議逐語録、参加者の振り返り、研究者記録である。分析にあたっては、協議が前進した場面（理解がそろそろ／捉え直しが起きる／支援が具体化する）と、その前提として機能した条件として（1）精選、（2）接続、（3）運用の整え（役割・時間・ルール）に着目して整理した。

第1期では、A気づき欄→B実態把握欄→C支援検討欄という順序が協議の見通しを形成し、担任の困っている状況を起点にチームで整理しやすくなる一方、C支援検討欄（目標・支援）の言語化で協議が停滞しやすいことが、振り返り記述および協議経過から整理された。また、補助ツールを増やすほど確認・記入・参照が増え、時間不足や二重入力が生じ、日常の運用として負担が大きくなりやすいことが示唆された。

第2期では、補助ツールを精選したうえで、同時編集による可視化、教育委員会資料等へのリンク、参考様式への自動反映を実装し、協議が停滞しやすい要因（調べる・写す・二重入力等）を低減するための接続を整えた。その結果、発言がリアルタイムに文字化されることで論点が共有されやすくなり、担任の困っている状況が「個人の悩み」から「チームの検討事項」へ移行しやすくなることが示唆された。さらに、資料参照と記録・文書化の接続が改善され、協議内容が次の一手として実行可能な形で整理されやすくなる傾向が見られた。加えて、協議前に確認した3つのルール（発言を評価しない／最後まで聞く／自分事として発言する）が共通の土台となり、支援を「紙の上の正解」として確定するのではなく、実践の中で試行し、うまくいったものを計画へ反映するという姿勢が、目標・支援の言語化を支える可能性が示唆された。

以上より、シンプルチャートを教師支援プログラムとして機能させる鍵は、ツール単体の機能提示ではなく、（1）手順と参照物の精選、（2）協議結果を文書化・共有へ接続する設計、（3）役割・時間配分・ルールを含む運用の整え、を一体として整備することである。本実践は2校を対象とした改善型研究であり、学校規模、校内体制、ICT環境、研究者の関与等の条件に影響を受ける。今後は条件の異なる学校における試行を重ね、活用場面（学年会、支援委員会、保護者連携等）の拡張とあわせて検討する必要がある。

キーワード：個別の指導計画、多様な教育的ニーズ、シンプルチャート、チーム支援